
Bonnie and Clyd

河野夜兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B o n n i e a n d C l y d

【Nコード】

N 8 4 7 8 L

【作者名】

河野夜兎

【あらすじ】

たとえ生き方を間違えたとしても、私は後悔しない。きっとボニーはそう思ってクライドを愛したんだと思うんだ。※この作品は肥溜ブタヲ先生企画の「晩春！どM祭り」参加作品です。

私は今日も路上で生きる（退屈）という時間を潰している。

帰る家はどこにもない。親って奴らはどこかにはいるんだろうけど、居場所なんて知らないしそんなモノはとうの昔にいないもんだと頭ん中から抹消済みだ。

だって、幼い私をゴミのように扱い簡単に捨てた奴らに持つ気持ちって「殺意」とか「憎しみ」以外ないでしょ？

だけど、そんな気持ちを持ち続けるなんて正直ダルいんだよね。親にされたことも顔もはつきり言っと思って思い出したくないしね。

私――、吉岡水葉^{よしおかみずは}って人間は今17歳で、中卒で、世間でいうところのマトモな学がない、住む家もない住所不定の路上生活者だ。

それでも生きてくにはどうしてもお金がいるから仕事はしてる。売れるモノ、それを売ってる簡単な仕事。

私が売るものは、17歳って若さを掲げたこの身体。もちろん世間では違法だってわかっててやってる。

でもこの仕事って、違法だとしっかりわかってる良識的と謂われている大人達にはすこぶる人気で、私の身体はバカみたいに高値で取り引きされている。

不況不況と騒がしい世間だけど、みんな私と一度寝るだけでほんと大枚はたくから、本当に不況なのかと首を傾げなくなるくらいだ。

この仕事はそこら辺で汗水垂らして働く奴らよりもリスクはかなり高いけど、高収入を得られるし何より超簡単だ。

恥やプライドを全部捨てられるなら誰だってその日からできる。
客が取れるかどうかは自分のやり方次第だけど。

路上生活してても、私の財布の中には常に万札が数枚入ってる状態が途切れることがない。

まあ、金を稼いだからって、別にたいした使い道なんてないっていうのもある。家がないから荷物が増えるのも邪魔だし、本当に欲しいものなんて実はそうそうないもんだし。

先の生活なんて計画は何もない。だって私がどうなろうと誰にも何の関係もないから。

どうせ私みたいなちっぽけな生き物の命がひとつ消えたとしても、世界はなにひとつ変わらないし、悲しんだりする奴なんてこの世に誰ひとりいないんだから。

むしろ、明日…、ううん、数時間後にコロッと死んでも全然いいよ。

ただし、自分で死ぬる度胸なんてあるわけはない我儘な性質だから、適当に誰かが殺してくれないかなというのが希望だ。

「殺人事件に巻き込まれる確率ってどんくらいなんだろ…」

ファミレスの薄茶色のガラス越しに見える、渴いたコンクリートのビル群と無機質に行き交う人の波を見つめて何となくそうつぶやいたら、自嘲が混ざる笑いがこみあげて、肩が上下に小さく揺れた。



全くもって退屈だ…。

毎日毎日、する事って言えば、金だけしかない汚いオヤジに買われてセックスするか、漫喫やネカフェで時間潰すかシヨッピングモールの散策するか…、そんな事の繰り返し。

友達はいない。

はつきり言ってこんな私に友達なんてできるわけないのは百も承知。ぶっちゃけ私は商売敵の同世代にはしこたま嫌われちゃってるから。

自分達が大して客取れないからって、バカみたいに僻まれてウザがられてるんだよね。

本当、みんな頭悪いよ。

いくら若くてもホイホイ股開けばいいってもんじゃないって事に誰も気付かないで、私が客を奪う卑怯な女だって怒ってやがる。

大体汚い身体して、香水振りかけて誤魔化して、ろくに洗いもしない汚い顔に化粧塗りとくった汚ギャルに、どこのマニアが大枚はたくって思ってるの？

つか、あんたら髪も相当臭いよ。頭洗ってるの？

マジ、汚くて、金払う価値ないよ。

てか、帰る家があってそこに戻って行くんだから風呂くらいは入れよな。

路上生活者の私にこんなこと思われるってマジバカみたいだね。

考えると可笑しくなって、また肩が上下に揺れた。



日が暮れたというのに、街は電灯やネオンが眩しく光り、昼間と違う明るさを醸し出している。「眠らない街」なんて、誰が言ったか知らないけど、そんな表現がしっくりくる程街は依然として賑や

かで、人があふれてる。

ファミレスから出て、ぶらりと歩きだしたとたん、ある常連客から持たされてる携帯がバッグの中で鳴動した。

「さて：と。仕事か：」

私は携帯を開き、西側にある総合駅のターミナルへ進路を取り歩き出した。

「もしもし？——うん。時間、空いてるよ？——わかった、今向かってる」

携帯に向かって少しだけ可愛いさを出す為に声のトーンをあげた。

顔は勿論、真顔だ。



常連客の名前は中野。

歳はもうすぐ40に手が届くといったところだ。

普通に平凡なサラリーマンで独身。けど、去年親が死んで思わぬ財産が転がりこんできたらしく、金だけはある男だ。

性格は内向的で金を使うことや娯楽なんて全然知らない残念な人間だ。

中野と出会ったのは、1ヶ月前で、今向かっている駅の西口だ。きっかけは本当に些細なことだった。

中野と私が駅のターミナルですれ違いざまに接触して、中野が手に持っていた缶コーヒーが飛び散り、私の洋服を汚したのだ。

運がいいのか悪いのか……。その時私は編み目の細かい白いサマーニットを着ていて、肩から胸辺りにかけて焦げ茶色の染みがついてしまった。

中野は、さすがの私もちょっと驚くほど慌てふためき、何度となく私に頭を下げて謝罪を繰り返した後、「不躰で申し訳ないが……」とクリーニング代として万札を3枚財布から取出した。

私は商売上、客を見る洞察力はそれなりにあるほうだ。

中野と接触したのは月の半ばをゆうに過ぎた頃で、世間一般のサラリーマンは月末のペイデイの前で、当然財布の紐は堅くなるはずだ。

それなのに中野はいとも簡単に私に戸惑いもなく大枚を差し出したのだ。

財布を開けた時に、まだ何枚も入っていた万札もチラリと確認済みだ。

格好――、着ていてる背広はさほど上等なものでもないし、持っている通勤カバンも全然大したことない安物だった。

そして、何より、この尋常じゃない腰の低さは会社の上の人間ではなく平社員だろうなど。

しかも歳の割りには全然女に免疫がないとみた。

それを証拠に、私は怒りの素振りを見せていないのにも関わらず、中野はあたふたと恥ずかしそうで全然私と視線を合わせようとしないうし、話をする顔がずっと赤くて会話にも全く余裕がない。

（独身のクソ真面目なオッサンかな……）

きつとろくに遊びもせずにせせこましく働き、金だけはある人間なんだろうなとその時は思った。

タバコの匂いもしないし、全身トータルしてかなり地味だ。ギャ

ンブルをしてたまたま大金を得たような淀んだ空気も感じられなかった。

歳を食っているにも関わらず、どこか純粋な空気さえ出ているような男で、ぶっちゃけ詐欺とかのカモになりそうな押しに弱そうな雰囲気も感じた。

とにかく、客にするには美味しそうな匂いがしたことは確かだ。こういう真面目なオッサンは良い客に化ける率が高いから。

私の読みは正解どころか、それ以上のものだった。中野はまるで恋愛ジャンキーのように私にのめり込んでいった。性質はMだろう。自分では何も決められず私に全てを任せるから。

中野との付き合いは適度にやりたいようにワガママに振る舞えるから私としては楽だ。

適当に会話をしてご飯を食べて、シティーホテルで一泊してヤルだけ。

それだけで中野は満足らしい。



駅の西口のコンクリートの壁に立ち、そわそわと私を待っている中野が視界に入った。

だからって慌てて駆け出すわけでもなく、普段通りマイペースで歩く。

中野の目が私の姿を捕らえたらしく、浮き足立ち歩き出した。その時――、

中野が誰かと接触した途端にぐにやりと地面に崩れ落ちた。

「え…何…？」

目の前の光景を、状況を飲み込めずに私は立ち尽くした。

西口にいる人間が、その誰かと接触する度にぐにやりと崩れ落ちていく。

刹那、突如鉄を裂くような悲鳴が上がり、人波が蜘蛛の子が散るよう逃げ惑っている。

私はまだ状況が理解出来なくて立ち尽くしてその様子を見ていた。

人がまた倒れた。

悲鳴がどんどん上がる。

あ、まただ。

簡単に数えただけで、中野を含めて5人は人が倒れてる。

状況をはっきりと理解出来ないままだけど、でも動物的本能は危険を察知してか、私は無意識な動かなかった足を無理矢理後ろへと引いていた。

そんな私の目の前に、全身黒づくめの、黒いキャップを目深にかぶった男が、薄い笑いを浮かべて私の目の前に立ちふさがった。

（ああ、そうか…。確率に当たる日が来たんだ）

そう思ったら、何だか突然過ぎて可笑しくなって、私は笑みを浮かべてしまった。

これで、退屈な日々に終わりを告げることができるんだ。もう、私という生き物の全てを無にできる…。

恐いけど、どこか嬉しかった。

（ヨウヤクシネル…）

心の中でつぶやいた。

でも、数秒待っても痛みを感じるでもなく、私の呼吸は止まることなく…。

「何してんの？早く刺して殺してよ」

私は黒づくめの男を見上げて催促の言葉を投げた。

「…お前、面白いな」

男は目を細めて笑い、私の手を引く。

「ちょー！ー！何っ！」

「一緒についてこい」

「は？」

「お前、退屈なんだろう？」

「！！」

「だったら、退屈さをふっ飛ばしてやるよ」

男は屈託のない笑顔を私に向けた。

タイクツナンダロ。

今の私に与えてくれる会話なんて、たったそれだけで十分過ぎるくらい心奪われる言葉だった。

私は吸い寄せられるように男の手を強く握り返して笑顔を返した。



駅の西口から少し南へ走り、繁華街の路地裏へ入り、男は少し返り血を浴びた黒いフード付きの薄手のジップパーカーと、黒い革の

手袋とかぶっていたキャップを脱いで料理屋の青いポリバケツの中に捨てた。

黒づくめの殺人者は纏った黒を取り除くと、とても人なんて殺せそうには見えない、甘くて優しそうなマスクの持ち主だった。

身の丈は、私より10センチは高い。私の身長は160センチだから、男は170センチほどだろう。

髪は何も手を加えた形跡のない黒髪で、短くもなく、長くもない。前髪は目にかかるほどの長さだ。

「…名前…」

彼に向かいそうつぶやくと、

「マナト。お前は？」

「ミズハ…」

私は名前だけを簡潔に告げた。

「腹減った。メシ食おう」 マナトは笑う。

「そうだね」

私も小さく笑みを浮かべた。

つい先刻、人を刺しまくってた殺人者——マナトと一緒に、私は繁華街の中にあるラーメン屋で夕食を食べる。

カウンターに横に並んで座るマナトは、美味しそうにチャーシュー麺を食べている。

そんなマナトを見ると、さっきの惨劇は本当に現実なのか疑いたくなる程、平穏な空気を感じた。

「ラーメン、のびるって」 マナトは私の視線を感じて、屈託のない笑顔を向け一言告げた後に、またズルズルと麺をすすり始めた。



大した会話もなくラーメンを食べ終えて私達は店を出て、今夜の

寝ぐらにする為に近くの古ぼけたラブホテルへと入った。

私がいつも所持している大きめのバッグの中には、買い揃えた新品の着替え一式に、コスメグッズに、電池式のこて、歯磨きや洗顔等のトラベルセットが入っている。

路上生活しているとは言え、不衛生な生活なんて冗談じゃない。お風呂は毎日入りたいし、着替えだって毎日しなきゃ気持ち悪いから。

一度着た服はゴミ箱に捨てて、必ず毎日新しい服を買って着る。じゃなきゃ、邪魔な荷物になるから。

部屋に入りマナトはソファーに身を投げて欠伸をひとつした。

「ねえ、どうして…、人を殺そうと思ったの？」

私はベッドに腰を下ろしてマナトに向かい合わせて尋ねた。

「んー…、退屈だったから」

マナトはやんわりと口元を緩めてそう応えた。

「家族…は？」

「いない。俺、天涯孤独の人間だもん」

「…死んだの？」

「お前は？ 家族は？」

マナトは逆に私に尋ねた。

「…さあね？ 生きてるのか死んでるのかも知らない」

私は自嘲気味に小さく笑った。

「俺の親父ってさ、人殺しで刑務所に入ってたよね」

「……」

私は黙ってマナトの話を聞いた。

「加害者の家族ってさ、この世じゃ、罪を犯してなくても、犯罪者と同じ…、いや、犯罪者は牢屋入って世間から隔離されるからまだマシなんだよな」

マナトの瞳が、氷のように冷たくなり、私は身震いを懸命に堪え

た。

「母さんも俺も、世間から人殺しの家族ってことで、散々虐げられて苦しめられた。どこに行ってもさ、人殺しの家族も人殺しだって…」

マナトはふっと虚ろな瞳で天井を見上げて小さく笑った。

「…そんな責められる生活に耐えられず、母さんは首吊って死んだ。8歳の俺を置き去りにして、独りで楽なほうに逃げちゃった。

親戚にも引き取りを拒否されて、擁護施設で暮らしてたんだ。生活は楽じゃなかったけど、ちゃんと高校卒業して施設を出て就職もした」

マナトは、ははっと喝いた笑い声を上げた。

「けどさ、場所は変わっても、どれだけ一生懸命頑張っても、世の中の人間の考えは変わることがなかった。人殺しの子供は、結局どこへ行っても人殺し扱いなんだよな…」

「もう、いいよ。マナト…」

何だか過去を話せば話す程、マナトは笑い声を増していき、それが私の胸をギリギリと締め付けて、呼吸をするのも苦しいくらいだった。

マナトが世間の人間に殺意を抱く気持ちは痛い程理解できた。

私も生きることが否定され、虐げられた人間だから。

「最高だね。人を殺しまくるって」

マナトは屈託のない笑顔を私に向けた。その笑顔は驚くほど幼い笑顔で…。

（この人、狂ってる）

そう思いながらも、私はそんなマナトの笑顔に胸の高鳴りを押さええることができずに、自然とマナトを胸に抱きしめていた。

きっと、私も狂ってる。

狂人が狂人に惹かれるのは、必然なのかもしれない。

そんな二人に未来なんてきつとない。

だけど、こうして今、マナトを抱きしめている私の胸は、何故だかとても満たされているような不思議な感覚に陥った。

「みずは、…お前、あったかいね」

私の胸の中で甘えた声でつぶやいたマナトは私の背中に両腕を回して、

「人肌のあったかさってこんなに気持ち良かったっけ…」
くすりと笑った。

「人肌の本当の気持ち良さなんて、そうそう味わえるもんじゃないよ」

そうつぶやきながら、何だか私も笑いが込み上げた。

それから、私とマナトはベッドに入り、まるでお互いの心の隙間を埋めるかのように何度も求め合った。

本当に不思議な感覚だった。

抱き合えば抱き合うほどに、まるで欠けた心のジグソーパズルのピースが埋まるような満ち足りた気持ちと、激昂に似た気持ちが混じり、爪先や指先がピリピリと痺れを感じた。でもそれが驚くほど心地良くて、私もマナトも幾度となく果てて、二人、くたくたになつてぐっすりて眠ってしまった。



真夜中に目が覚めた。

ベッドの中にあるはずの私とは別の温もりが失くなっていることに気付いたら、心の温度が急激に下がって、私は目を見開き跳ねるように起き上がった。

「……」

沈黙して私は慌ててマナトを探す為に視線を部屋に泳がせた。

「…びっくりしたあ」

マナトはソファ―に座り、私を見つめて驚き混じりの笑みを浮かべた。

そんなマナトを見たら、何だか両目が熱を帯びてチクチクと痛んだ。

「置き去りにされたかと思った…」

つぶやいたと同時に、白いシートにポタポタと水滴が滲んだ。

たった数時間しか経ってないのに…。

マナトが私の心に染み込むには、十分過ぎるくらいの時間だったことに気づいたら、何だか自分の弱さを痛いくらい感じて涙が止まらなかった。

マナトはそんな私に歩み寄り、

「何で置き去りにしなきゃいけないんだよ？」

やれやれと困ったような笑みと一緒に、

「約束したじゃん。みずはの退屈をぶっ飛ばしてやるって」

そう告げて私を抱きしめてくれた。

「足手纏いになるかも…」 不安が口をつく。

「そうなくてもさ、いいよ。どうせいつかは終わりが来るんだから。いつまでも逃げ仰せることは無理だってバカな俺でもわかってるし」

「……」

「でもさ、なるべく逃げ仰せたいな。 だってさ、まだまだみずはと俺は始まったばかりだしな」

マナトは笑う。

「限られた時間、俺は人をどんどん殺すよ。きっとそこはどんなことがあっても変わらない。それが俺が選んだ世間への抵抗で、生き

てく道だから」

「何があっても、ついてくから…。きっと何があっても私は後悔しない。マナトが選んだ道、私もずっとついてくから」

ずっとついてくから…。

虚しい言葉だけど、今は、マナトといえる今だけは虚しいなんて思ったりしない。

少しでも長く。

マナトの傍にいたい。

「…まるで、ボニーとクライドみたいだよな」

マナトは笑った。

「ボニーとクライド？」

私はマナトを見上げた。「そう。1930年代にアメリカを駆け回り強盗や殺人を繰り返して逃げ回ったカップル」

マナトは楽しそうに語った。

「最後は二人、車ん中で警官に蜂の巣にされて仲良く揃って死んだんだけどな」「日本じゃあり得ない話だね…」

そうつぶやいたけど、心の中では二人が羨ましいと思った。

「みずは、お前羨ましいと思っただろ？」

マナトは私の表情から心を読み取り声を上げて笑った。

「イカレてるよね」

つぶやいた私に、

「俺もボニーとクライドが羨ましいと思ったから、イカレてるな」
ははっ、と笑って私をきつく抱き寄せた。



翌日、私達はラブホテルを出て駅の南口へと向かった。

警察が沢山いる中、私達は堂々と手を絡めて駅のホームを目指した。
(意外とバレないもなんだな…)

いつ警官に止められるだろうかとドキドキと胸は激しく脈を打ったけど、無差別な殺人事件があったにも関わらず、人波はいつもと変わらなく溢れていて、まるで事件が起きたことなんて嘘みたいだなと思ってしまいう程、駅は平穏だった。

券売機で一番遠い駅の切符を二枚買って、改札に通しプラットホームへと続く階段を降りて、構内の売店でブラックの缶コーヒを二本とガムを買った。

駅売りの新聞を買おうと手を伸ばしたら、マナトが私の手を遮った。

会計を済ませて理由を聞いたなら、

「新聞読みそうもない俺達若者がわざわざ新聞買うって不自然じゃない？それに、事件があった駅で事件の記事を読んでたら、なんか端から見たらちょっと印象に残りそうだしな」

マナトの言葉に、なるほどと思った。

確かに、情報を得るなら私達世代なら、新聞なんかより携帯からのほうが自然だ。

「あ…、携帯…」

私はバッグから携帯を取出して、

「これ、契約者は中野なんだ…。どうしよう…」

「中野って昨日みずはが言ってたオッサンか？」

「うん…」

私は携帯を握りマナトの意見を待つ。

「それ、貸して」

マナトは私に携帯をよこせと手を出した。

頷いて携帯をマナトに渡すと、折り畳まれたそれをバキリと折って、
「あとで捨てよう」

と壊れた携帯を私に差し出した。

「多分、事件の目撃者はさ、みずはが殺人者に連れ去られたって思
って、警察に情報を流してると思う。それなのに携帯使った履歴が
残ってたら、みずはが共犯だってバレる。

あくまでもみずはは連れ去られてるって立ち位置のほうで、逃げ回
る俺達には都合がいい」

マナトはそう言って笑った。

ホームに電車到着を告げるメロディーが流れた。

「さあ、今日は何人殺れるかな？」

屈託のない笑顔でつぶやくマナトに、私も黙って笑みを返した。

それから到着した電車に乗り、私達はこの街から離れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8478/>

Bonnie and Clyd

2010年10月19日07時50分発行